

私たちは愛するこの地で生き続けたい！

大地震・電源喪失で高レベル廃液が沸騰・爆発すると大破局！

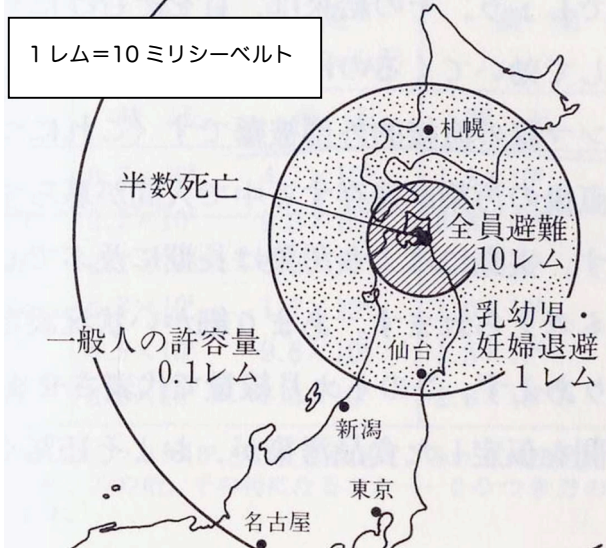
六ヶ所再処理工場には高レベル放射性廃液がチェルノブイリ事故の9.4倍の量が溜まっています ガラス固化しなければならない超危険物が液状で存在

大量に溜まっている高レベル廃液 現在六ヶ所再処理工場には約240m3の高レベル廃液が溜まっており常時冷却されています。電源喪失が起こると沸騰しさらに放射線分解水素による爆発の可能性も出てきます。右図はごく一部でも環境へ放出されたとき評価です。この真偽について国と原燃へ見解を問いましたが根拠資料がないのでコメントできないとのことでした。（原燃08.9、国08.12回答）事業者や国は安全ならばデータを示し私たちの不安を解消する責務があるはずです。

今回の福島第一原発事故を受けて私たちはこの危険性について4月27日午後1時半から原燃PRセンター別館で再度原燃を問いただし対策を要請します。

真っ先に被害を受けるのは従業員の方々になります。黙ってはいはひどい目にあいます。私達自身が子孫私達そしてこの地を守るため納得のいく説明を求めましょう

図Ⅳ-15 再処理工場事故の一評価例
(避難の区分は政府指針による)



「核燃料サイクル施設批判」高木著七つ森書館より

「高レベル廃液 100m3 を含むタンクが破壊されその 1 % が外部に放出されたとき」の評価例

「再処理」直下に活断層が



六ヶ所
M8級地震の恐れ
東洋大教授ら指摘

東日本大震災の元になった大地震 M9による大きな余震が想定されており、それがこの地で起こる可能性があります。

本体見逃しが危険証を



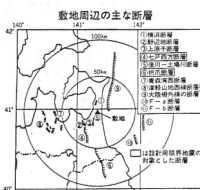
M8 が想定されているのに、これでは！M7クラスで破局的事故の可能性！これだけは絶対に避けたい

原子力産業新聞

1995年2月2日

第1777号
創刊号(昭和30年)1号
1部220円(送料別)
購読料1年(12号)2200円
(送料別)500円
(広告費別)

燃料サイクル施設 十分な耐震設計
最大地震にも対応
M6.5の地下地震も考慮
が説明



核再処理工場の重大事故

国民の半数死亡も

西独で報告書が波紋

【ボン十四日伊藤（光）特派員】使用済み核燃料再処理工場で万一、冷却施設が不能になれば、西独人口の半数に当たる三千万人が強力な放射能被爆で死亡する。こんなショッキングな内容を盛った研究報告の存在が、西独の連

邦自然保護市民運動連盟によってスッパ抜かれ、報告を隠していた内務省と自然保護団体の間で大論争を呼んでいる。

市民運動連盟の発表によると、この報告は、内務省の委託でケルンの原子炉安全研究所が作成、昨年八月、同省に提出された。報告書によれば、再処理工場で冷却施設が完全に停止すると、爆発によって工場周囲百キロの範囲で

全住民が致死量の十倍から二百倍の放射能を浴び即死、最終的死亡人数は西独人口の半分の三千万人になる可能性があるという。市民運動連盟は、内務省がこのような重大な研究結果を国民の目から隠していたことを非難、マイホーファー内相とマッソーヘーファー科学技術相に対し引責辞職を要求している。さらに同連盟の科学者グループは、この研究が主として冷却施設の事故だけを原因として想定し、地震、洪水、飛行機の墜落、テロなど様々な潜在的事故原因に目をむけていくと、研究

風下の数千人死亡、増殖炉事故 英で

【ロンドン十四日大高特派員】

英国の核施設検査局は十三日、発表した地域に設けるこ

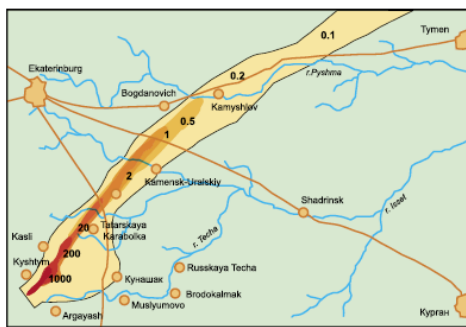
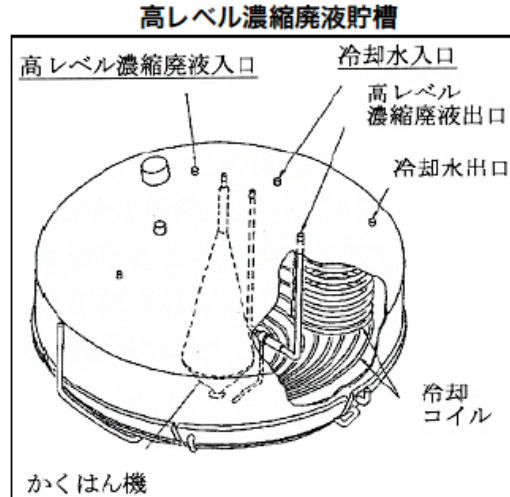


Fig. 4. Radioactive pollution as the result of the explosion on September 29, 1957 [4] (pollution density for Sr90 Ci/km2).



日本原燃株式会社 再処理事業所再処理事業変更許可申請書（1996年4月26日）より

廃液は常に冷却し、排気しなければならない。地震で停電になったり、冷却パイプが破断したりすると、15時間で沸騰する。また数時間で水素濃度が爆発下限になると学会誌に書かれてある。貯槽は10基、合計680m3
本格稼働になれば常時500m3貯蔵保管されるらしい・・・。

（事例）フランス、ラ・アーグ再処理工場

電源喪失高レベル放射性廃液 爆発寸前事故

1980年4月15日、ラ・アーグ再処理工場の電源室で火災が発生、電源喪失状態になり、高レベル放射性廃液を冷却できず沸騰直前までになった。急遽約100km離れたカーン市に電源車を要請、3時間後に到着、13時間後にやっと冷却が始まり電源喪失状態を脱することが出来た。電源喪失状態が長引いていたなら沸騰・水素爆発の破局的事故に発展し北半球が広く汚染されていたであろうと言われている。*六ヶ所再処理工場はラ・アーグの技術で建設された。

（事例）ウラル核惨事 1957年9月29日、南ウラルのマヤーク再処理工場（核兵器原料生産）で高レベル放射性廃液貯槽の冷却系統が故障、タンク内の温度が上昇し爆発した。ストロンチウム90を指標とする汚染地図、青森に上図の汚染図を重ねると